

# 山口大学におけるキャリア学習の取り組み

平尾 元彦

## 要旨

山口大学では、学生の“キャリア学習”に力を入れてきた。自ら学ぶ姿勢と機会の実現を目指し、学習の目標を、①キャリアの理論と実践力を身につける、②経済・社会の理解と実践力を身につける、③社会人基礎力を身につけるものとする。授業は学習のきっかけであり、思考トレーニングとしてのレポート課題や正課外の学習機会の紹介をメニューに取り入れる。受講生の8～9割が自らのキャリアを考えるきっかけとなったと答え、成果が計測された。正課外の学習機会として、インターンシップ、学内業界・企業研究会など様々な学びの場を提供する。しかしながら参加率は高いとは言えない。キャリア学習の効果計測の方法、一人ひとりのキャリア形成を支援するメニューの拡充と参加拡大が課題である。

## キーワード

キャリア学習, キャリア教育, インターンシップ

### 1. はじめに

学生の社会的・職業的自立のための教育改善・体制整備が求められるなかで、山口大学は2011年4月、「キャリア教育の基本方針」を定め、全学的キャリア教育の推進を宣言した。同年の新たな大学設置基準の施行、いわゆる「キャリア教育の義務化」に呼応しつつ、大学自らの意志でキャリア教育を推進する姿勢を明確にしたものである。

特徴的なのは2番目の「キャリア学習の場を提供する」だろう。“キャリア教育”が学校サイドの言葉とすると、“キャリア学習”は学生側の言葉。学生自ら学ぶということである。もちろん学習が円滑に進むための考え方や方法論の教授、学習機会の提供は大学の責務として実施をするが、基本的には自分で学ぶ。全学必修のキャリア教育科目（低学年・高学年各1単位）はキャリア学習の入口であって、それがすべてではない。正課外の多様で多彩な学習機会を活用することで、学びを深化させる。志向も能力も異なる学生たちが学ぶべきキャリアは

当然一人ひとり異なる。すべての学生のキャリアを学ぶ場の創出を目指している。

山口大学では、正課内外の学びの場を組み合わせさせてキャリア学習を推進してきた。本稿では、これまでの取り組みをとりまとめるとともに、学生アンケート調査から見えてきた課題を明らかにしたい。

#### 山口大学 キャリア教育の基本方針

山口大学は、教養教育・専門教育、そして、正課外の様々な活動を通じて、山口大学憲章に掲げた、自らの未来を切り開くことのできる人材を育成していくため、ここにキャリア教育の基本方針を定め、全学的にキャリア教育を推進していきます。

1. 大学におけるすべての教育研究活動を通じて、学生のキャリア形成を支援する
2. 就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する
3. 学生のキャリアビジョンを明確にさせ、社会的・職業的自立にむけて指導する

## 2. キャリア学習の内容

キャリア学習とは何を意味し、何を目標とする学習活動なのか。この点を明確にすることは重要である。ただしこれは、発達段階によっても異なるし、学校の教育方針にも依存する。あくまでも山口大学の目標であることをお断りして、ここにその概要を記載したい。

山口大学では、以下に示す3つの目標を設定して学生一人ひとりの学びを促している。

### 山口大学 キャリア学習の目標

- ①キャリアの理論と実践力を身につける  
～ いろいろな人のいろいろな生き方働き方を学び、自らのキャリア選択力を養う
- ②経済・社会の理解と実践力を身につける  
～ 広く経済・社会を理解する力を身に付けるとともに、ビジネスマインドを養う
- ③社会人基礎力を身につける  
～ 社会で働く上で必要となる基礎的な力を理解し、自ら継続的に高める力を養う

第一の「キャリアの理論」は、学問としてのキャリア理論の理解を含むものではあるが、そこが中心ではない。むしろ重要なのは「人生いろいろ・キャリアもいろいろ」という現実の理解である。働くなかで直面する様々な困難や、やりがいなどを知る。先を歩む者たちとの直接的な対話のなかで、あるいは、書籍・雑誌記事など文献による学びを通じて、自らのキャリアを選択する意思と能力を身に付けることを目的とする。将来の目標を持つことは大切であるが、そこに行き着くプロセスを理解し、必要なスキルとマインドを身に付けることは、同じくらい大切だろう。人生の先輩たちの生き方・働き方を通じて、自らを考える学習である。

2番目の「経済・社会の理解」は、すべての学部の学生にとって極めて重要であることを

伝え、「世の中のことをもっと知ろう」とのメッセージを発信している。就職活動は、卒業後に自分が所属する組織を選ぶ活動であるが、そもそも知らないものは選びようがない。社会へ羽ばたく前準備として、まずは知ることが大切で、そのための学習が必要とされる。学習の場として、企業の方々をキャンパスに招いて開催する研究会や新聞を読む力をつける勉強会などがある。

3番目の「社会人基礎力」は、経済産業省が提唱する概念の名称であるが、ここでは広く社会で活躍するために必要な基礎力と理解する。コミュニケーション能力や論理的構成力など、大学教育で身に付けることができる力の数々である。この点について、産業界のニーズは強いものがあるだろう。インターンシップなどビジネス学習の機会を通じて自覚を促すとともに、継続的に高める意欲と方法論の修得を目指す。これも大学で学ぶべきものと考えている。

## 3. 授業での学習内容と評価

学習の場には、授業と授業外がある。まずは授業のなかでの学習活動を紹介したい。山口大学では、平成25年度入学生よりキャリア教育は全学必修となった。約2千人の入学生すべてが学ぶべき共通教育科目である。低学年1単位、高学年1単位。医学部を除き1年生と3年生にそれぞれ実施される。

平成25年度に3年生対象で実施された共通教育科目「キャリアと就職」（平成27年度より3年生対象「キャリア教育」へ移行予定）は年間5クラスを開講し、約800名が受講する大教室の授業である。大教室は一度に大勢の学生に伝えるメリットはあるが、学生たちが受身になる面は避けられない。学生一人ひとりが自らの問題としてキャリアを捉え、考えるためのレポート課題（宿題）を課すなどの工夫をしてきた。「授業はきっかけ、学習の推進力」との

位置づけを明確にして、学びを促す。さらに受講生には、正課外の学習機会の情報が配布資料や電子メールで提供される。授業は授業外の学習を知る場でもある。

以下、このレポート課題の概要を紹介する<sup>1)</sup>。そして、平成 25 年度前期授業の受講者に実施したアンケート調査の結果をもとに、この授業とレポート課題への評価を試みたい<sup>2)</sup>。

### 3.1 キャリアインタビュー

人生の先輩の歩んできた道を学び、自分自身のキャリアを考えることを目的とする課題である。職業研究ではないので、自分が就きたい仕事をしている人でなくていい。人選は評価の対象でないことを明確にし、身近な人に話を聞くよう促した。5月のゴールデンウィーク直前に説明し、連休中の帰省時にインタビューを実施できるよう配慮している。

実際には誰にインタビューしたのかをアンケートで尋ねたところ、父親 38.7%、母親 30.3%で、親にインタビューした学生が7割近くを占める。このほか、親戚やアルバイト先の社員、また、高校の先生にインタビューした学生もいた。

仕事経験や必要な能力、困難や転機という項目を聞くほか、これから就職活動に取り組む私へのアドバイスをもらうことも、あわせて指示している。本人をよく知る親や恩師のアドバイスは身に染みるものがあるようだ。「自分が感じていたことと異なる親の想いが聞けた」などの感想も多い。キャリアを学ぶ第一歩として身近な方の話を聞くことで、働くことをリアルに感じるとる学習課題である。

### 3.2 社会人基礎力

山口大学がリアセック社と共同で開発した社会人基礎力診断システムを用いて、自分の現状を把握した上で、高めるためのマニフェストを記載し、評価する<sup>3)</sup>。

5月に診断して7月にはレポート提出なの

で実質2ヵ月程度ではあるが、その間に実現可能かつ具体的行動を伴うマニフェストを記載しなければならない。単にガンバルと言うだけでなく、「いつもは見てるだけの学生実験を、自らすすんでやる」「論理的に話す技術の本を読み、ゼミ発表で実践する」などである。できることから始めようとのメッセージを発信しつつ、学習を促す。社会人基礎力を意識するとともに、継続的に高める目標管理にチャレンジする課題である。

### 3.3 企業研究きり発見

仕事に対する自分の価値観を見つけ、その観点から会社を研究する手法を学ぶ課題である。会社のホームページや就職ナビの情報だけではない、新聞・雑誌記事などの情報活用する方法を学ぶことも目的のひとつである。

実際に学生たちはどの情報源を活用したのだろうか。アンケート（複数回答）によると、活用した情報源は、書籍・雑誌 32.8%、新聞記事 12.2%、番組・映像 6.7%で、会社・組織のホームページ 82.6%に比べるとはるかに少ない。新たな情報ツールの活用という点では課題を残す結果となった。

### 3.4 キャリアモデル

自分が共感する働き方を、具体的人物を通じて発見することを目的とした課題であり、本を読むことを条件とした。経営者や研究者など、著名人・有名人の生き方・働き方を本で学び、働き方への自分の価値観を明らかにする。

学生たちがどのような情報源にアクセスしているのか、主な情報源をアンケート（単一回答）で質問した。回答者のうち 20.8%が自分が持っている本を活用し、この課題のために本を購入した者は 8.6%である。就職支援室の本を借りた学生は 26.2%、大学図書館は 2.5%、公共図書館が 8.3%であった。

この質問には、インターネットの情報が

31.5%と最多であった。電子書籍の選択肢をつくらなかつたので若干含まれる可能性はあるものの、本と指示したにもかかわらずネットの情報を主に活用していることが読みとれる。今、Web ページには人の生き方・働き方を学ぶ様々なコンテンツが無料で提供され、キャリア学習の便利なツールであることは間違いない。学生にとっては、ネット身近で紙の本が縁遠い存在だということも事実だろう。多様な情報源の活用という意味では、紙の書籍限定を厳密にした方がよかつたのかもしれない。

### 3.5 キャリアデザイン

将来の自分のキャリアビジョンを表現してみることで、方向性を考えるものである。他の課題は調べるテーマが具体的に与えられているが、この課題はそこも含めて自分で考えることが求められる。授業の集大成として、自分自身のキャリアを描くものであるが、あまり深刻にならないように、決して自分のビジョンを“決める”ものではないとのメッセージも添えている。

大学卒業までと卒業後の2つについて、各400字以内の記載を求めている。

### 3.6 レポート課題の難易度・評価・効果

上記5つの課題について、難易度・評価・効果を尋ねた。アンケート回答者の各得点は表1のとおりである。

難易度について、全体にやや難しいと感じているものの、強くその傾向があらわれているものではない。キャリアインタビュー・社会人基礎力の課題は学生が取り組むことが明確であるからか、得点はやや低い。これに対して他の3つの課題は調べ方・描き方の自由度が大きいが難しく感じたのかもしれない。

目標達成の自己評価も全体的には肯定的評価が否定的なものを上回る。ただしこのなかでは、企業研究の課題がやや低い。どの会社を調べたらいいのかわからない、どのように調べた

表1 レポート課題の評価

	難易度	自己評価	効果
①キャリアインタビュー	2.71	3.93	4.06
②社会人基礎力	2.59	3.62	3.92
③企業研究きりぎり発見	3.46	3.21	3.55
④キャリアモデル	3.42	3.58	3.84
⑤キャリアデザイン	3.26	3.59	3.89

注)3つの質問への回答に、そう思う(5点)、ややそう思う(4点)、どちらでもない(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)を与えて、平均点を算出した

Q1 この課題は難しかったですか(難易度)?

Q2 この課題の目標を自分なりに達成できたと思えますか(自己評価)?

Q3 この課題をやったことは自分のキャリア形成に役立つかと思いますか(効果)?

らしいのかわからないまま進んだ学生が少なからずいたことが想像される。

自身のキャリア形成に役立つかとの観点から効果を質問したところ、全体では肯定的評価となった。なかでも身近な人の話を聞くキャリアインタビューは、自己評価と効果がともに最も高く、キャリア学習の手法としての有効性が示された。

### 3.7 授業の効果

共通教育科目「キャリアと就職」は、大学生生活の半分を経過し、卒業後の道を意識する必要のある3年生を対象としている<sup>4)</sup>。キャリア学習と就職活動のきっかけとする「きっかけ効果」を狙った授業であり、講義の内容も課題レポートも、そのように設計されている。

受講した学生に、授業全体の評価に関する質問を行った。結果は表2に示すとおりであり、全体として高いきっかけ効果が計測された。ただし、多様なキャリアを学ぶきっかけ、就職活動のきっかけになったとする回答に比べて、社会人基礎力や経済・社会の理解の項目は低い。両分野について、授業外の学習機会への誘導がもっと必要であることが示唆される。

表2 共通教育科目「キャリアと就職」の評価

	単位:%					
	そうである	ややそうである	どちらでもない	ややそうではない	そうではない	わからない
1. いろいろな人のいろいろなキャリアを学ぶきっかけとなった	59.9	34.7	3.8	0.4	0.4	0.7
2. 経済・社会に興味を持ち学習するきっかけとなった	42.3	44.1	9.8	1.3	2.0	0.4
3. 社会人基礎力を高めるために行動するきっかけとなった	38.5	41.2	14.9	3.8	0.7	0.9
4. 就職活動を理解するきっかけとなった	58.8	34.1	6.0	0.4	0.2	0.4

#### 4. 正課外の学習推進

キャリアは授業だけで学ぶものではない。授業以外の様々な学習機会を自ら選択して参加するよう学生には求めている。ここでは、活動内容の概略を紹介するとともに、卒業時のアンケート調査による学生のアクセス状況と評価を整理する<sup>5)</sup>。なお、正課外の活動の詳細は平尾（2013）を参照されたい。

##### 4.1 本から学ぶキャリア学習

学習の方法として、「人に学ぶ」「本に学ぶ」の両方に力を入れる。講義や学習会・研究会などで人との出会いを創出するとともに、「大学生なんだから本を読もう」とのメッセージを贈り、人生の先輩たちの生き方・働き方を本から学ぶことを推奨する。

中央図書館・工学部図書館に「キャリア学習・就職活動支援コーナー」を設置、就職支援室には約2千冊の本を配架して、学生たちのキャリア学習の場を提供している。また、著名な作家の先生をキャンパスにお招きしたキャリア学習講演会を開催するなど、本から学ぶキャリア学習を推進している。

##### 4.2 人から学ぶキャリア学習

働く人たちとの直接的な対話は、学習の重要なツールである。ひとつは職場で学ぶインターンシップ。仕事を体験しながら社員の方々との会話のなかで働くことをリアルに感じるとる貴

重な学習機会である。山口大学では、山口県インターンシップ推進協議会を通じた県内での就業体験のほか、就職ナビ等で募集される公募型インターンシップへの参加を積極的に促している<sup>6)</sup>。また、短期間（1日程度）で仕事を学ぶ機会としてのキャリアを学ぶ☆1day学習会の開催にも力をいれる。職場訪問やキャンパスでの学習会である。アンケート調査では、5日間以上のインターンシップへの参加者は回答者の13.6%、5日未満は11.7%。いずれかに参加した者は22.9%である。山口県インターンシップ推進協議会のインターンシップはほぼ5日間以上で、吉田キャンパスの参加者は150名程度である。5日未満が同程度いることを考えると、全体の参加者は300名ほど。一学年の2割程度と推測される。

もうひとつ、山口大学で力を入れる取り組みに学内業界・企業研究会がある。毎年、11月

##### 学内業界・企業研究会 趣旨

学内業界・企業研究会とは、山口大学の学生が、業界動向や会社・仕事をより深く、よりリアルに理解できるよう、経営者・人事担当者、また、本学の卒業生など会社等でご活躍の皆様をキャンパスにお招きして開催する研究会です。本学ではこの学内業界・企業研究会をキャリア教育の一環と位置づけており、学生たちはこの機会を活用して、幅広く業界・企業を研究し、就職活動ならびに自身のキャリア形成に役立てることを期待しています。

～2月の開催期間中 400 社を超える企業・官公庁の協力を得て開催してきた。経営者や人事担当者との出会いのなかで、働くことを学ぶ。体験して学ぶことも重要だが、頭で学ぶことも大切。事実を知るだけでなくマインドも感じとってほしいと願っている。研究会への参加の状況は、よく利用した 24.0%、少し利用した 33.7%。あわせて利用率は 57.7%。半数を少し超える程度である。

#### 4.3 広報基盤と相談基盤

学習の支援基盤には、広報体制と相談体制がある。授業外の学習機会はすべて任意で、学生たちの主体的参加を期待する。このため学習の意義と内容を伝える広報は重要である。学部棟や食堂・図書館などへのポスター掲示のほか、全学教職員へのメールマガジン「学生支援センター／就職 NEWS」（毎週月曜日発行）。主に低学年むけに紙媒体の「キャリア学習しんぶん」を月一回発行し、意識啓発のための広報を強化している。メールマガジンの利用状況は、よく利用した 9.3%、少し利用した 29.4%。あわせて利用率は 38.7%である。

また、学生たち各々の志向・能力は異なり、学ぶべきキャリアは一人ひとり異なる。就職支援室のキャリアカウンセリングに学習支援の要素を持たせることで、個別支援を強めてきた。在学中の就職支援室の相談・セミナー利用状況は、よく利用した 18.8%、少し利用した 38.3%。あわせて 57.1%である。

#### 4.4 キャリア支援活動の評価

アンケートの最後に、自身の就職活動への評価と山口大学の就職支援への評価を尋ねた。得点化したものを見ると、自身の就職活動評価とメールマガジンとの関連以外はすべてキャリア学習へのアクセスの高い学生の方が、就職活動の満足度も、大学の支援への評価も高いことがわかる。

表3 自分の就職活動と山口大学の就職支援への評価

	自分の就職活動	山口大学の就職支援
インターンシップ		
参加あり	3.64	3.89
参加なし	3.21	3.57
学内業界・企業研究会		
よく利用した	3.72	4.10
少し利用した	3.24	3.67
利用していない	3.16	3.38
就職相談・セミナー		
よく利用した	3.63	4.30
少し利用した	3.36	3.76
利用していない	3.17	3.28
メールマガジン		
よく利用した	3.35	4.25
少し利用した	3.25	3.79
利用していない	3.36	3.50

注) 自分の就職活動、山口大学の就職支援への回答にとても良かった(5点)、良かった(4点)、どちらでもない(3点)、あまり良くなかった(2点)、良くなかった(1点)を与えて、平均点を算出した

### 5. キャリア学習の成果と課題

2013年6月17日の日本経済新聞に“就業力”ランキングが掲載され、山口大学が就業観分野で全国トップとなったことが報道された。在学生への調査によるもので、「大学でのキャリアに関する科目は就職活動に役立っているか」「就職についてどんな心境か」の項目で高い評価を得たことが大きい<sup>7)</sup>。これまでのキャリア学習の取り組みのひとつ成果と考えている。

本稿は、山口大学のキャリア学習について、その目標と活動、そして、現段階での評価を試みた。これまでの学習活動には一定の成果が見られるが、取り組むべき課題は多い。本稿の最後に、キャリア学習のさらなる推進のための課題を指摘したい。

第一は、学習効果の計測である。キャリア教育科目は、キャリア学習のきっかけとなることが確認されたが、大学教育全体を通じた学習効

果の評価までには至っていない。適切な評価と継続的に高める仕組みづくりが求められる。

第二に、参加しない学生の問題である。正課内外の様々な取り組みにより主体的なキャリア学習を促してきた。学習の効果はみられるものの、それらは参加した者のみが得られる。当然ながら参加しない学生にその効果は無い。山口大学における参加状況は、選択科目である「キャリアと就職」の受講者は該当学年の約5割、インターンシップで2割、学内業界・企業研究会で5割程度にすぎない。また、キャリア学習の取り組みに参加するのは就職活動時期と重なる3年生・大学院1年生にほぼ限定される。参加率の向上とともに低学年の参加促進が課題と言える。

そして、上記参加しない学生の問題と関連するが、キャリアを学ぶことが苦手な学生、嫌いな学生など、たとえ学習機会があったとしても敬遠し、取り残される学生たち。キャリアを自ら高める力が弱い学生たちは確実に存在する。キャリア学習は一部の優秀な学生だけのものではない。すべての学生が大学で学ぶことだと考えると、優秀でない学生たちが学ぶメニューの開発も取り組むべき課題のひとつと言えるだろう。早期かつ重点的に学習を促す教育体制の整備を急がなければならないと考えている。

(学生支援センター 教授)

#### 【参考文献】

- 平尾元彦・藤井文武・宮崎結花, 2010, 「社会人基礎力の育成と自己目標管理—山口大学における CHECK-MANIFESTO-ACTION ループの試み—」, 『大学教育』Vol.7, 35-46
- 平尾元彦, 2013, 「正課内外のキャリア教育—山口大学学生支援センター10年の歩み—」, 『大学教育』(山口大学大学教育機構), Vol.10, 2013.3, pp.13-24

#### 【注】

- 1) 実際には、本稿で紹介・分析した5つの課題のほか、「就活 Information」「就活インタビュー」という就職活動への理解を深める課題を課しているが、この2つは省略する。
- 2) アンケート調査は、前期の授業最終日7月23日・24日の出席者に対して、調査票を配布・回収して実施した。有効回答数460である。学部別には、人文学部14.1%、教育学部4.6%、経済学部52.0%、理学部20.2%、農学部9.1%で、ほぼ3年生である。
- 3) 経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」に山口大学が提案した「学部1年で着出し CHECK-MANIFESTO-ACTION ループで定着させる継続的な社会人基礎力の育成と評価」が採択され2008年度に取り組んだ。平尾・藤井・宮崎(2010)参照。
- 4) 授業の詳細は平尾(2013)参照
- 5) アンケートは2013年3月卒業・修了予定者に対して卒業直前の1~3月に実施したものである。山口大学吉田キャンパス(人文・教育・経済・理学・農学の各学部および大学院)の学生に対して実施した。有効回答数1099。このアンケートはこの年度の4年生・大学院2年生を対象とするもので、上記の授業アンケートの学生とは学年が異なる。
- 6) 本稿では、インターンシップを正課外の活動と整理している。工学部・理学部・農学部は、条件を満たせば単位認定がなされるが、少数である。
- 7) 日本経済新聞出版社「親と子のかしこい大学選び」(2013年6月発行)参照